

## 父

今日 あした

父が脳血栓で倒れたのは、私が四十歳の時だった。

母からの知らせの電話は夜の十時を過ぎていた。夕食後に意識を失ったそうだし、さいわい、兄一家も同じ敷地内に住んでいたのも、兄嫁も付き添って救急車で近くの救急病院に運ばれた。

父はそこで一週間ほど生死の境をさまよい無事生還した。だが、右半身不随と、言語障害が残り、板橋区にある国立の老人病院にそれから一年間入院した。

当時、父は七十二歳、母七十歳、父が退院してから老々介護が始まった。

その頃、実家には九州に住んでいた八十歳の母の姉が、「もう一人住まいは無理ですよ」と周囲に言われて移り住んでいた。彼女は心身共に頑健で、ちっとも手が掛からなかったのだが、母は、大いに周りの同情を集めた。

世の中がちやうど老人介護に力を入れ始めた時期で、特に実家のある武蔵野市は、福祉都市と言われるほど、介護に関して充実していたこともあり、至れり尽くせり。市の職員が度々やってきて世話を焼いてくれる。

早速、伯母は近くの老人施設に入所することになった。

父は、それから十年間、一進一退の日々を家で過ごすことになる。

現在私は七十五歳。両親が悪戦苦闘していた年代である。

辛かっただろうなー、苦しかっただろうなー。

母は、口癖のように

「お父さんがいてくれるから、私は生きていられるのよ。生きていて下さいよ。長生きして下さいよ」と言っていた。

私も母と同じことを言うだろう。夫お父さん、なのだ。母は半身不随になっってしまった父の身の回りの世話をしながらも、父に頼り切っていた。

だが父は……。

父は無口だった。普段、「あー」とか「むー」とか以外、ほとんど言葉を発しない。威厳はあるのだが、母にしょっちゅう怒られていた。

「お父さん、子供を少しは叱って下さいよ。教育を私に任せっぱなしで、知らんふりではありませんか！」

「あー、いやー、お前が怒るから……、一人で怒ったら子供が委縮するじゃないか」

「そんなこと言ったって、子供は言わなければわからないですよ！」  
「そうかい、美弥子、お母さんの言う事を聞くんだよ」。  
私にそう言い、それでおしまい。

私が短大の時、併設の同大学と合同文化祭をした。

ベトナム戦争を取り上げて、私は、新聞社に勤めている人の伝手を頼って写真を手に入れ、パネルを作っていたのだが、準備が間に合わない。大学生の男子学生に、お願いして家に来てもらい我が家の応接間で最後の仕上げをしていた。徹夜のつもりだった。

そこに父が帰ってきて、

「もう夜だから、帰ってもらいなさい」。

「明日の文化祭に間に合わないのよ、いいでしょう」と私。

「美弥子、はじめは守らないといけない」と、父。

「お母さん、何とかしてよ」私は母にSOS。

「私も起きていますから……」と、母。

ふい、と部屋を出て、だんまりを決め込んだ父。

こんなこともあった。

その日は、母が出かけていて、父と私は二人で夕食を食べていた。

父は、毎晩晩酌をする。ウイスキーの水割りを自分で作って、決まった量だけ飲む。その後、たばこ（ショートホープ）を吸う。それも自分で決めていて、その本数だけ毎日吸っている。

私は、女友達三人で、二泊三日の能登半島旅行から帰ったばかりだった。

旅行中、友人の一人がタバコを吸う。そして他の二人に勧める。一人は、断っていたが、私は面白がって、何回か、貰って吸った。

家に帰って、食後に、父がタバコを吸っていたら、私も吸いたくなった。父の吸っているのを、じっと見ている、吸い終わった灰皿を持って台所に行き、父の吸い殻を手で伸ばし、火を点けて思い切り吸った。

「いい気持ち」

何食わぬ顔で食卓に戻り、食事を終えた。そして、父がタバコを吸うのを待った。父は変な顔をして私を見ている。だが、私はそれどころではない。

父がタバコに火を点けた。

もう消すだろうか。

息をつめて見ていたら、父はすぐに灰皿にタバコを置いた。消えている。

私は、他の空いた皿と一緒に灰皿もお盆に乗せて立ち上がり、台所に急いだ。見るとタバコは、もみ消されているのではなく、少しだけ吸って、表面の火を上手に消してあった。

あわててそれに火を点けて、力いっぱい吸ってから、父の優しさが胸にしみ込んだ。タバコを吸いたがっている娘のために、父は残してくれたのだ。怒りもせず……。

もう、タバコを吸おうなんて思うのは止そう。心の底から思った。

若い頃にはそんなこともあったなく。

時は経ち、父が脳血栓を起こしてから十年目。元来無口な父は、言葉が出なくてもあまり不自由を感じないらしく、話す方は、一向に上達しない。マンツーマンで先生が付いて、一生懸命練習をしてくれるのに、見ている方が気の毒だった。歩行のリハビリも同じ、車椅子を押してもらうのが一番楽そうだった。

革細工の教室もあった。色々な工具で皮に模様をつけ、作りたいものの形にカットしてから太い針で縫って、色々なものを作る。小物を入れるバッグ、メガネケース、ペンケース、キーホルダー、職員が手伝ってくれ、役に立つものがたくさん出来た。母や私が喜ぶと、父も嬉しそうだった。福祉に力を入れている武蔵野市のおかげだ。

色々な教室へ行くのには、市のワゴン車が近くまで迎えに来てくれる。

私が実家にいる時は、それを出迎え、見送る。乗客は同じような教室に通うお年寄りで、ほとんどの人が顔見知りになり、世話をしてくれる看護師さんとも、すっかり顔なじみになった。

ある日のこと、いつもどつしり構えている父が、不自由な足を速め、利き手でしっかりと乗降口の階段の手すりにつかまり、エイ、とばかりに体を持ち上げて、ワゴン車の中に乗り込み、見晴らしの良い一番前の席に座り、涼しい顔をしている。

それを見た女性の看護師が、何か言いたげに……、でも黙って、次に乗り込む人の世話を始めた。

後から乗って来た、普段から大きな顔をしている利用者の男性は、父の方を指さしながら、その看護師に何か言っている。父に向っても、何か言ったようだった。だが、父はそっぽを向いて知らんふり。顔が半分笑っている。

こんな一面も父にはあるのだ。

「やるじゃない！ 頑張って！」私は思わず心の中でエールを贈った。

父は八三歳の春、自宅で意識を失って病院に運ばれた。病名は心不全。

「患者さんは、意識がほとんどない状態です」

と、医師に説明を受け、その状態が一週間続いた。

亡くなる前、母がしばらく父の顔を見ていて、涙を抑えながら窓辺に行った。その後、兄嫁が父の顔をじつと見ていたのだが、やはり涙を拭いながら私の手を取って、父の前に連れてきた。

父は、私の顔をじつと意思のこもった眼で見ている。

何も喋らない父のその目は饒舌だった。

「ありがとう」の言葉の外に、数々の感謝の気持ちが伝わって来る。涙が止まらない。母も義姉も泣いている。寡黙な父の豊かな意思が私達を包む。

そして父は静かに目を閉じた。

ベッドの脇の画面に映った心電図が、スーッと真直ぐの線になった。

了